雪は少ない、でも　硫黄岳はよかった

山行日　2019 年 1 月 1 3 日～14 日

行　程　13 日(日)

美濃戸口=やまびこの村 7:30-9:50 赤岳鉱泉(テント設営)10:30-12:15 赤岩ノ頭 12:40-13:05 硫黄岳 13:40-15:10 赤岳鉱泉(テント泊)

14 日(月)

赤岳鉱泉 7:45-9:30 やまびこの村=美濃戸口

費　用　交通費　約 9,000 円　　他　1.000 円/1 人（鉱泉テント泊代）

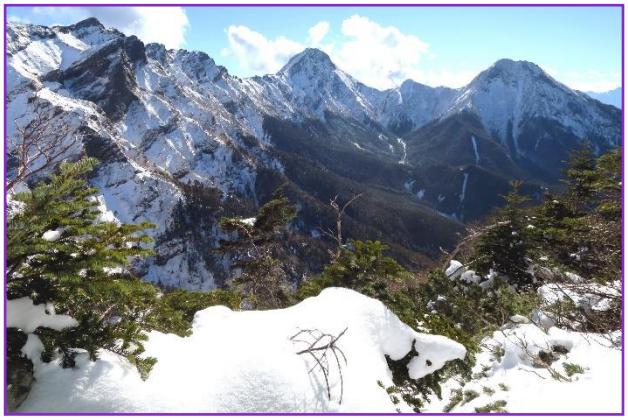
今年はこの時期にしては雪が少ないと言われている。美濃戸口でもほとんど雪はない。

林道を歩いている登山者の皆さん「ごめんなさぁ～い」。強い視線を横目で感じながら、車で赤岳山荘まで入る。７：００に着くも駐車場は満杯。3 連休だからなぁ～。

すぐ下の「やまのこ村」の駐車場にどうにか場所を確保し準備。７：３０に硫黄岳めざし出発し、北沢の林道を進む。雪は少ないが、雪が溶け再度氷化したところは、まるで大きなスケートリンク。凍ってなければドンドコ行ける林道も、もたつきがち。さらに山並みの陰となっているせいか、曇天を思わせる薄暗さには滅入る。しかし、冬だからこそ一本一本の木がすくっと立ち、それらが整然と並んでいる様子には幾何学的な美しさを感じる。

出発して 2 時間あまり。赤岳鉱泉の屋根と青く輝く巨大アイスキャンディーが目に入る。若い女の子が 2 本のバイルを使って、氷を砕き散らしながら上っている。かっこいいなぁ～。俺もあと 40 年も若ければ・・・・。しかし、見入っている場合ではないのだ。今日はこれからテントを設営し、硫黄岳まで行くのだ。「もうここで満足」という声をあったが完全に無視され、１０：３０サイトを出る。

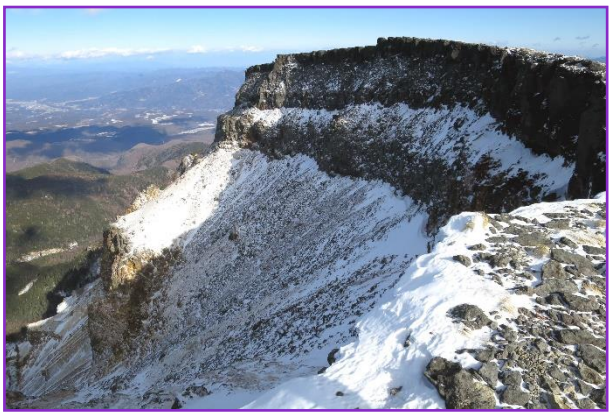
登り始めから急登。しかし、北八ヶのシラビソの樹林帯に似た穏やかな風景にはほっとさせられる。30 分も歩いただろうか、昨日赤岳鉱泉に泊まった先発隊とすれ違う。下山するメンバーの顔は、みな安堵したように見える。これから登る我々は・・・・・・・。



樹間から阿弥陀岳が見え始め、その樹林帯を抜けると突如として、阿弥陀岳、赤岳、横岳の 3 峰が眼前に飛び込んできた。適度に白い衣をまっとった 3 峰は、昼の強い光を受け神々しく輝いている。

赤岩ノ頭に着くと、これから登る硫黄岳がドカンと見える。登っている登山者がまるで豆粒のように小さい。「あそこまで行くのか? ずいぶんありそぅ～」。そんな話をしていると、Ｌから「１４：００までに頂上に着ければ、横岳まで行きますよ。」との話が。「おい、おい、おい・・・・」との声も。

稜線に出たせいか風も強くなってきた。思いのほか早く、硫黄岳山頂に到着。１３：０５である。さてどうなるのだ・・・・・・。肝要なＬはメンバーの意見を聞き、今回は、下山することとなった。しかし、せっかく来たのだから火口の先端まで行ってみようと歩き始めた。雪が少なく石がごろごろした歩きずらい道を、アイゼンをガシガシ言わせながら進む。さすが、爆裂火口はでかい。



その昔、爆発前の古阿弥陀岳火山(現八ヶ岳)は小御岳火山(現富士山)より約1.000mも高かったという話を思い出しながら大きく口をあけた爆裂火口を眺めていると、自然に対する畏敬の念すら感じる。

１３：３０下山開始。下りはなんと早いことか。今登ってきた硫黄岳も視界から消え、阿弥陀岳・赤岳・横岳の３峰も樹林に隠れた。ただひたすらに下る。変化のない樹林を下っていると、やけに時間が長く感じられる。やっと鉱泉の屋根が見えた。

頑張ってくれたアイゼン等を整理し、ジャンボテントに全員が集まったのは１５：３０頃だったか。「夕飯にします?」「それとも乾杯？」。 返事を確認する必要もなかった。ワインのボトルが一気に空いた。テントの外はまだ煌々と明るい。その後も、ウィスキー、日本酒、焼酎、ビールと次々に・・・・・・。合間を縫ってＬが夕食を作り始める。その手際よさと味には定評がある。作っていただいた３品。みんなのほころんだ顔が料理への満足感を表していた。

おいしい食事とお酒。話が弾まないはずはない。「ここだけの話だけどぉ～」「え～、うっそう～」等々を連発しながら・・・・。そんな話をしていると時間が経つのも早い。気が付けば外は真っ暗。就寝は１９：００となった。ちなみに起床は６：００とのこと。いくら疲れたとはいえ、「これから 11 時間もねるのぉ～」。

目を瞑るがなかなか眠れない。ずいぶん時間が経ったと時計を見るが、まだ１２：００前。ごそごそ皆が動き出したのは起床３０分前、天井にライトを当てるとプラネタリウムのようにキラキラと輝いていた。「まだ早いんじゃない。」と言いながらも結局全員起きる。睡眠時間をもてあそんでいたのは皆同じようであった。

朝は、カレーうどん。うまい。「下山したら温泉に入って、それから・・・・お蕎麦ですかね。」などと言いながら赤岳鉱泉から下山を始めたのは、７：４５だった。

今回も、リーダーをはじめとするメンバーと天気に恵まれ、素晴らしい山行だった。　　感謝。